
魔王（正義）に選ばれました。

茜空 裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王（正義）に選ばれました。

【Zコード】

Z0760X

【作者名】

茜空 裕

【あらすじ】

ある夏の日、高校2年の松岡優介は一人の痛い少女と出会った。少女は神と名乗り、優介に私の世界の魔王になつてほしいと頼まる。条件付きで俊介は魔王になることを決め、少女の創つた世界に飛ばされる。そこはRPGのような世界・・・の筈がRPGの常識からボール3個分ほどずれた世界だったわけで。魔王になる筈だったのに、魔王らしからぬことをする羽目に・・・。

01 痛い子に付きまとわれて

「魔王になつてください！！お願いします！！」

「……………はい？」

高校2年生となつた夏のある日。

無性にアイスが食べたり、近場のコンビニへ出かけたとき。

ガリ
リ君ソーダ味をとりあえず3本買い、店を出た直後だつた。

「お願いですー！一生のお願いですからー！私の世界の魔王様になつてくださいーーー！」

一人の少女につかまつた。

色白の肌で、真っ白なワンピースを着た、黒い長髪の10歳ぐらいの女の子。

「え？ あ、なに？ なに君？ なに言って

「本ッ当にお願いしますつてーー魔王がいなきや世界が完成しな

いんですよ……だからつ、だからあ

（・・・うつわー、なにこの子。なんだよこの子。これが俗にいう
痛い子？発言が痛い、存在が痛い。おまけに周りからの視線が痛い）

これは関わっていけない子だと思い、田も合わせさせずにしておきたいとする。

しかし痛い少女はしつこく付きまとい、魔王様、魔王様にーーー』

卷之三

しようと関係がない。

・・・歩いていても埒があかな
い!

ここは全力で走って痛い子をふりきる。

俺は一瞬歩みを止めて、ピタッと止まる。

チラッと後ろに田をやるといきなり止まつた俺に向かつて首をかしげる少女の姿。

そして、ダツ！！と地面を蹴った。

「！？逃げた！あの人間逃げやがつた！－くそ－、私は絶対諦めないからね－！」

背後から負け惜しみともとれる声が聞こえてきたが無視だ。

俺は早く家に帰つてガリ リ君を冷凍庫に片付ける任務がある。

一度溶けたガリ リ君はガリ リ君にあらず。

そんなこんなで数分が過ぎた。

我が家に帰つた俺はすぐに玄関をぐぐり、キッチンにある冷凍庫にガリ リ君を放り込んだ。

どうも今は家族はみんな外出中のようだ、物音一つしない。

少しばかり走つたので喉が渴いた。

冷蔵庫にあるコカ・ーラをコップに一杯、一気に飲み干す。

喉を刺激する炭酸が一気に駆け抜ける。

「ゴクッ・・・ゴクッ・・・ふつ。やっぱ炭酸はコーラに限る」

「だねー。コーラ以外の炭酸は認められないよ、異論は認めるけど」

「ブフ ッーー」

一度飲んだ「一」を少量の胃液と共に吹き出す。

ブクブクと泡をたてて床を濡らす「一」を見た少女は顔をしかめて言つ。

「うわ、きたねっ。これぐらいの」とてそんな驚いてるんじや立派な魔王になれなこよ?」

「ゲホッ、ガホッ……な、なんでお前がここに……? てかいつから、足音一つ聞こえなかつたぞ……?」

俺は声がした方にゆっくりと振り返つた。

そこにはダイニングテーブルの上に座り、手を頭の後ろで組んで「一」笑いながら足をせわしなく動かしていた。

キッキンに来たときは確かにいなかつた、はずだ。

気付かれないようここに来るのはまず無理だ、物音ひとつしない家じゃ小さな扉を開く音さえ響く。

最初からどこかに隠れていると考えてみたが隠れる場所なんかどこにもない、まずなぜこいつが俺の家を知っているのか。

「お前……一体なんなんだよ……?」

「よくぞ聞いてくださつた！」

少女はそういうとテーブルの上に立ちあがる。

そして俺をビシッ！…と指さすと真剣な顔で叫んだ。

「そう、私は…」

すると今度はテーブルからジャンプしてクルクルと回転しながら床に降りる（そのあとの決めポーズは欠かさない）。

その身のこなしさ、とても10歳程度の少女にできるようなものではなかつた。

再び少女は俺に両手でビシシイッ！…と指さし、長い髪をグルングルン振りまわしながら衝撃的なことを叫んだ。

「神と神の間に生まれた神の一人だあ　…！」

01 痛い子に付きまとわれて（後書き）

新作です。

もう一つの小説が終わっていらないのに新作です。

ただでさえ沢山書いてるのにまた書いちやいました

中から管理できなくなつて更新が遅れるかもですけど、なにとぞよろしくお願いします。

02 不思議な少女の不思議な力

「…………」

「へへーん凄いでしょー。まだまだ未熟ではあるけど、それでも世界を一つ作れるほどの……ちよ、痛い痛い！止めてよ！何すんの！？」

俺は少女にそつと近寄つて首根っこを掴みにかかった。

これ以上迷惑をかけられたら正直ウザイ。

一度親のところに連れて行つて文句を言つてやる。

ついでに近場の精神病院に行くことをお勧めしよう。

「だから痛いつて一髪、髪まで引っ張つてるつて！」

「つるねー。とつあえずお前の家教えろ。お前の親と話したいことがある」「

今の場面を見られたら俺は犯罪者さんの仲間入り確定だらう。

まあ、家の中だから誰かに見られる心配はないだろうけど。

しかしこんなに「うるさい」と声が外まで聞こえそうだな……一応、口も縄で縛つて……って何考えてるんだ俺。

「痛い痛つ……！痛いいつてんでしょーがアアアア……」

少女はブチ切れると右手を大きく振り上げて人差し指で俺を指した。

・・・何も起こらない。

場の空気が一瞬でしらける。

「さつきから何のつもりだ……。こつちは良い迷惑でだな
ッ！？」

それは突然だつた。

突然、身体が動かなくなつた。

身体の自由が利かない……！？

まるで金縛りにあつたかのように、息苦しくなり呼吸が荒くなる。

何だこれ……どうして身体が動かない……？

俺はそのままバランスが崩れ、床に倒れこむ。

首から上は何とか動く、俺は少女を見た。

少女はまるで勝ち誇ったかのような表情で語りかける。

「全く、さつきから痛いって何度も言つてゐるのに・・・。止めてくれないから天罰下しかやつた」

「て、てめえ・・・何しやがつた・・・!?

「あれ? まだ動けるんだ・・・流石私が田をつけただけはある!」

少女はフフーンと鼻を鳴らし、白慢げに腕を組む。

ふと、少女は俺の傍にしゃがむと鼻をシンシン突いてきやがつた。

ガウーと指に噛みつこうとするが慌てて手を引つ込めたので届かなかつた。

それが面白かつたのか、少女はキヤツキヤと笑い始めた。

・・・「ゼミ。

「んー、鼻を突くのも面白いけどなー・・・やっぱーの方がお約束かな?」

そういうと少女は右手を前に突き出した。

そして、俺は目を疑つた。

「ほいっ」

「はア！？」

どういうことか、少女の右の掌から突然油性ペンが出てきた。

何も無いところから、魔法でも使ったのか。

あまりの光景に俺は声も出せず口をバケバケと動かすだけだ。

少女は油性ペンのキャップを外すとフンフンと鼻歌交じりに俺の顔に落書きし始めた。

しかし俺は抵抗もせずにただ茫然とするだけ。

「やっぱ落書きと言つたら嘘かな・・・いや、頬に渦巻も良いかも。額に肉は絶対だし」

「お、おま・・・なんだ今の・・・? なんで何もないと」JRからペ

ンが・・・・? それ以前になんで身体が動かないんだよ! -? 「

やつとの思いで俺は言葉を発することができた。

少女は俺の叫びに特に驚いた様子もなく、ただ淡々と告げる。

「だから私は神なんだから、これぐらいできないと駄目なんだよ。学校じゃ実技テストだって出るんだからね。・・・あ、本題」

少女はポンッと手を叩くとペンを適当に放り投げ、少しづつと向き合いう。

「それでね、やつさから何度も言つてることだけど・・・私の世界の魔王になつてくれないかな? かなかな? 」

03 新たな生活は魔王として

「・・・順を追つて話してモラエナイデショウカ？」

俺は床に突つ伏しながら片言になりながら尋ねる。

体はまだ動かないが、頭の方は落ち着きを取り戻している。

何度も言つが、いきなり魔王になれなんて言われても何の音か分からぬし、どうしようもない。

すると少女は、突然泣き顔になつて身の上話を言い始めた。

「それがね、それがね・・・。本来、魔王になる筈だつたマー・オングさんがくじ引きで銀河系3周の旅が当たつたつて言つて突然旅行に行つちゃつたんだよ・・・。おかげで私の計画はめちゃくちゃ！－魔王がいなきや世界が始まらないつてのにドタキャンするなんてどういうことなの！－途方に暮れて彷徨つてたところを心優しいこの星の神様に会つてね、気に言つた奴を一人連れてつてもいいつて・・・うう、ありがとー神様ー！－」

少女は手を組んで天に向かつて、感謝の気持ちをこめて礼を言い始めた。

自称とは言え、神様が神様を崇めるなんておかしな話だと思ったが、そこは触れないでおく。

「で、俺のことを氣に入つたから無駄にしつこついて来たつてわけか？」

「その通り！なんかアンタから邪悪なオーラを感じた・・・気がしたからね」

「邪悪なオーラってなんだよ邪悪なオーラって！？俺そんなオーラを発するほど悪人じやねーから！－しかもそこ気がしたからかよ！－あととつとと金縛りを解きやがれ！－」

俺は少女に向かつてわめきたてる。

先にちよつかい出したのはそつちなの「ブツブツ・・・・」と咳きながら少女はパチンと指を鳴らす。

同時に体を縛る呪縛みたいなもんが消えたのか、不快な感覚がなくなる。

両手をグーパーと動かして体の調子を確かめてから、立ち上がりて服を軽く払う。

「悪いけど、それは無理な話だわ」

俺が突然言い放つたその言葉にて、少女は反応できずにポカンとした表情を浮かべたあと、焦つたような疑問の表情を見せた。

「ここまで必死に頼んだのにあつたりと断られれば、誰だって焦つたりするだろ？」

少女が何か言おうと口を開けたとき、「偶然重なるタイミングで俺は話し続ける。

「俺にだつて生活はあるんだよ。そろそろ長期休みも明けて学校始まつし、部活だつてやんなきやなんねーしさ。俺、陸上部なんだけど顧問が厳しいんだよ・・・。それに家族だつて心配するだろうからな」

だから無理だ、と俺は最後まで言い切つた。

今言つた言葉に嘘はない。

あと一週間もすれば学校は始まるし、部活はほぼ毎日サボることもできぬ。

家族にだつてなんと言えばいいか、魔王になつて来ますなんて言つたときには病院に連れていかれるだろ？

これだけ言えば諦めてくれるだろ、と俺は思つていたが、そつも上手く話は進まないようだ。

少女はなぜかホッとした顔をして言つた。

「そういう問題なら大丈夫なんだよ。私は神様なんだから人間の一人や一人、時間を操つて時空の旅に連れてくことだって簡単！それに魔王だよ？好き勝手に暴れても誰も文句は言わない、ていうか言えないんだよー？時間を気にしなくていい暴れ放題の旅行つて考えてみたらどうかかなー？」

徹底的に喋り方がウザエ。

まあそりだな、と顎に手を添えて再度考え方直してみる。

魔王なら何をしても許されるってわけではないけど、確かに魔王に文句を言つ奴だつてほんどいない。

せいぜい逆らうとしてもお決まりの『あのキャラ』意外いなのだから、何をしたって咎められたりしないだろ？

溜まつたストレスを発散するには丁度良いかもしれない、魔王というわけなら罪悪感もほとんど感じない。

それに時間を気にしなくていいのも凄く魅力的だ。

この世界とは別の世界を味わえるのも、息抜きだと思えばかなり良い。

旅行、という響きが俺をじわじわと呑み込み始める。

「そりにそりにイー？魔王の特権、チート能力！！魔法を使つ」と
も許可しちゃいまーす！！」

「魔王になりますー！手続きをお願いしますー！」

即答する。

俺は魔法と言つ言葉に酷く惹かれた。

魔法にロマンを感じない人間は人間じゃねえ。

元気いっぱいの俺の返事に少女は満足げなニヤニヤした笑みを見せた。

「ありがとねーーー」の恩はとりあえず忘れないよーーーそれで、私の世界の魔王様となる者の名は？

「名前かーーー俺は『松岡 優介』。以後よろしく。ーーーで、そちの名は？」

「『ルムナ』。それが私の名前だよ。ではーーー」

少女はそう言つとバツと両手を広げ、天を仰いだ。

そして、一ヤ一ヤと楽しそうな笑みを俺に向けて、地球の裏側にまで届きそうなほど大きな声を張り上げた。

「私の世界・・・『エーメントグラウンド』へ、魔王一名様」
「あんない！」

その瞬間、期待と不安を胸にして、俺の魔王としての新しく短い生活が始まった。

気が付いたら、草原にいた。

なにを言つてゐるのか分からねえと思うが、俺もなにを言つてゐるのか分からねえ。

それは一瞬の出来事だった。

たつた一回の短い瞬きの間に、我が家からこの草原に飛ばされたのだろうか。

目を凝らして辺りを見渡したが、地平線の果てまで縁が広がっていて、建物らしきものは一切見当たらない。

空には雲ひとつない綺麗な青色で染められていた。

やけに広い草原だな、と正直な感想とともに謎を違和感に気付いた。

なにも無い、草原？ 青空？

・・・それは、魔王がいるような場所だろうか？

俺のイメージでは、魔王は高い塔か城の天辺でふんぞり返つていて、その周りは荒れ果てた大地と赤黒い空があるんじゃないのか？

しかし俺の周りには、本当に何も無い。

RPG風に言えば、ここは『始まりの草原』と言つたところか？

・・・それって、魔王が来るような場所じゃなくて、お決まりの『あのキャラ』・・・勇者が来るような場所じゃないのか？

「おこいひ、責任者出でい。ルムナ出でいーーー

「あ、なに？呼んだ？」

ふざけで言つたつもりなのに、なんてことか返事があった。

空から聞こえて、直接頭に響くような声だ。

それは確かに神様っぽいが、喋り方といい声といいどことなくイラツとくる。

しかし丁度いい機会なので思いつきり文句を言わせてもらおう。

「呼んだもくそもねえよ。俺つて魔王なんだよね？魔王つてもつといつ、禍々しい城にいるもんじやないの？なんだよーー。明らか勇者が来るよつなどこにじやねえか

俺の迷惑極まりないクレームに対して、ルムナは少し黙りこむ。

しづらしくして困ったよつな口調でルムナは喋りだす。

「いやあ、それがねー・・・。」この世界は作ったばかりだったから村や神殿の準備ばかりにうつりを抜かしてたら魔王の設定を忘れちゃつて・・・。や、途中まではちゃんと覚えてたんだよーでもいきなりの魔王逃亡事件の所為で頭がこんがらがつちゃつて・・・」

「テヘッ」

「テヘッ じえねえよーーなんだよそれ、世界の管理人のくせにやけに適当だなー? 手前H、その感じで色々と忘れちまってるんじやねえのか?」

「ギクシ。そそそそんなことはなによーーわわ私だって神様なんだからそそそれぐらいちゃんと管理しててるよーー。」

「そんなこと言つわりにはめつけや動搖してるじやねえか・・・。めつけや不安だけどもつ良いよ・・・。そんなことより町だ、近くに町はないのか?」

「え、あー、うん。最寄の町は・・・西の方角に小さな町が一つあるね」

「・・・距離は?」

「ゼットヒロク三かな」

遠過ぎだろーと声が漏れそうになるが喉で何とか押しつぶす。

地平線の果てまで何も無いのだから、それぐらい仕方ないだろつ。

俺は大きく溜息を吐いてから再びルムナに尋ねる。

「念のため聞くけど、魔王としての力は使えるんだよな？さつきは魔法使つてもOKって言つたのに使えないってんなら流石にブチ切れるぞ？」

「それなら多分大丈夫。魔法とかの大事なところは一番に設定しておいたからね！」

「他の所は大事じゃねえのか。ま、その町まで行ってみるからナビゲート頼むわ」

「分かったよ。じゃあ、私が指す方向に歩いてってね。でもこんなことするのは特別なんだよ？君が新人の魔王様で説明もなにもしてなかつたのと、スポーン地点のミスが偶然重なつたからなんだよ？」

「どつちもお前のミスじゃねえか。俺に言われる筋合いはない」

しかし指すつてどういうことだ?と俺はルムナに聞こいつとするが、その直前に突然現れた眩しい光に視界を奪われる。

一瞬俺は驚いたが、視力が戻つてすぐに成程、と納得する。

目の前には真っ直ぐ伸びた光りのラインが浮かんでいた。

それは恐らくルムナが出した西の村までの道案内だろう。

俺はそのラインに沿つて歩き始めた。

開始早々で嫌な事件が起きたが、それも覆すほど面白い出来事もあるだろう。

俺はそう期待を込めて大地を踏みしめた。

04 新世界と痛感のリス（後編）

しばらく更新遅くなるかもです。

「なあルムナ。こきなりで悪いけど、この世界について詳しく述べてくれないか？」

草原のど真ん中を歩きながら、どこのからか俺のことを見ているアーヴルムナに向かって尋ねた。

そしてどこのからか俺の声を聞いてるアーヴルムナは、少し不意を突かれたかのよつて驚いてから答える。

「じつしたの急に？ 突然そんなこと聞くなんても」

「だから悪いって言つたら？ まあ、ちょっと気になることがあってな」

「正直言つと、ちょっと気になるどこの話じやないのだが、そこは教えて嘘を吐いておく。

この世界についてなにも知らないなんて不安だし、小さいことだつて少しでも知つておきたいと言つ理由からだが、それ以上に好奇心からといつ理由が強い。

俺の住んでいた世界（以後、現実と呼ぶ）と、この世界『ホームレストグラウンド』はどのような違いがあるのか。

魔王の特権とやらの『魔法』が使える時点で『ホームページングラウンド』はファンタジー寄りの世界だということは向となく分かった。しかし、それだけ分かつてももつと詳しい所について全く分からないでは仕方がない。

「んー、そうだね、。それじゃ、まずは『ホームページングラウンド』の特徴について説明しようか。と、その前に・・・」

ルムナの声が、いきなり途絶えた。

「いくら名前を呼んでも一向に返事が来ない。

なんだらうが、と俺はいぶかしながら、その考えもすぐに別のものへと移つた。

空から一つの光の塊が落ちてくるのは見えたからだ。

なんだアレ?と俺は思つたが考える余裕はなかつた。

光はものすごいスピードで俺の方へと向かつてくる。

・・・これ、完全に直撃コースじゃね?

「ヤバ・・・ツ!」

俺はササツー！と後ろに4・5m避難する。

直後、「オオオンー」と爆音を響かせ、光の球が俺が直前までいた場所に落ちた。

もし少しでも行動が遅れていたらと思うとゾッとする。

俺は恐る恐る田の前にできた小さなクレーターを覗きこんで、尻餅をついた。

クレーターから光の球が飛び出したのに驚いて、後ろに倒れたからだ。

光の球は良く見てみると、透明な小さい翅がパタパタと羽ばたいているのに気付く。

光の球は、伸ばす様に体をひねると（とは言つても球なのでよく分からない。あくまでそう動いたように見えた）、どこから声を出しているのか分からぬが喋り始めた。

「んー…やっぱこっちの姿の方が生き生きしていいね！喋つて会話できるのもなんかスッキリするし…！実体のない体でテレパシーで会話するのは息苦しいからね、神様っぽくはあるけど」

「…ん？」の声、ルムナか？いやでも、その姿…

「『おお、よく私だつて分かつたね。姿につけてはさて置いて、『Hーメントグラウンド』・・・メンドクサイし『Hーメント』でいいや、その説明をするね』

いや、そこはさて置くなよ。

しかもメンドクサイからつて略すのはどうかと嘆つん、と思つたが口に出さない。

こんなのも神様なんだし、姿を変えることぐらい簡単だろ。

この世界だつてここつた創つた世界なのだから、どうじつよいつひとつ自由だ。

そういう考えてこむつから、ルムナは説明し始めていた。

「まず、『Hーメント』は2つの世界に分かれてるの。表と裏つて感じかな? 私達が今こいつして立つている・・・まあ、私は飛んでるけどね。こつちは表世界の『常界』つてとこで、もう一方の裏世界が『魔界』。で魔王である優介はー・・・その・・・」

「『魔界』に行く手筈だつたけど、そつちのミスで『常界』に来ちまつた、と・・・。流石神様だな、メンドクサイことしやがつて」

俺はルムナに皮肉たつぱりに言い放ち、光のラインに沿つて再び歩き始める。

ルムナはぱつが悪そうに笑いながら、説明の続きを語る。

「テヘヘ・・・で、その2つの世界を行き来するには、一つの世界どちらにも唯一存在している洞窟『深い迷い道』ってところにある『繋がりの門』を通らなきゃいけないの。だから第一目標はそこから『魔界』に行くことだね」

「本当にメンドクサイなさい・・・。ストレス発散のつもりで来たのに、逆にストレスを溜めることになんなんて・・・」

「ストレス溜める原因を作った私が言つのもあれだけど、ブチブチ言つても仕方ないよ?ほら、町がもう見えてきたし。詳しい話はそこでまた言うね!」

ルムナはパタパタと翅を鳴らして数m先の道を飛び始めた。

俺は目を凝らして、光のラインのずっと先を眺める。

町が見える、ここからでは米粒程度の大きさでしか確認できないが、そこには確かに人工物らしき建物が存在している。

「まあ、まずはあの町に行くことが先決だな。宿屋か酒場で今後についてじっくり話そうじゃないか。・・・酒場には入れるか分かんねえけど」

俺はルムナに向かつて呟いて、歩きっぱなしになってしまった足をやがてに速める。

ホームページにて来て、記念すべき初めての町だ。

どんなといひだらうか、どんな人がいるだらうか、どんなものが見られるだらうか、どんなものが食べられるだらうか。

俺の頭の中は、溢れ出る期待と興奮で一杯だ。

溢れそぞりまでなる感情を抑えて、俺は遠くに見えていた町を眺めて歩きを速める。

町まで着く間も、どんなものやら展開が待っているのかと興奮しつゝなしだった。

「いやー、ここは良いところだな」

俺は町の中心にある広場にいた。

そこでは多くの人が行きかい、情報や食料の交換、嗜好品などの売り買いが行われていた。

よつするこ、市場だ。

肉屋らしき店の恰幅の良いおばさんや、新鮮な魚を売りさばいている筋肉ムキムキのおっさんたちなどの威勢のいい声が市場を騒がせる。

人混みに揉まれながらも、俺は広場の中央にある大きな樹の根元へ移動する。

そこは木の葉の日陰になつており、地べたに寝転がり一眠りしている人や、本を読む人がたくさんいた。

「ふふん、この町は特別力を入れたところの一つだから当然だよ！
名付けて『ワニス・タート』……」

「ふふん。ま、とりあえずは宿探しだな。今日はこの町に泊まつて色々と見て回りたいし。なんか良い見世物とかあるんなら後で教え

てくれ

俺は、懐に隠れたルムナの面々を適当にあしらしながら、近くに宿屋がないか目を凝らす。

なぜルムナは俺の懐に隠れているかと言つと、今のルムナの姿はまんま妖精だ。

で、驚くことにだ、この世界には妖精がいるらしい。

妖精つてのはかなり珍しいらしく、コレクターの間ではかなりの額でトレードなどを行つていてとか。

もし運悪く、ルムナの姿を見られでもしたらさらわれる可能性があるやうだ。

・・・なら、別の姿に変われば良いと言つたのだが、ルムナは『この姿が気に入つてゐから嫌』なのだとか。

近い内に、こんなまがい物の妖精ではなく本物の妖精を見てみたいものだ。

そういう考え方ながらも、俺は近くを歩いていた中年の男性に声をかけて宿がどこにあるかと尋ねる。

「宿屋かい？ それなら東の大通りを真っ直ぐ進んで行つたら『鶏小屋』って酒場があるから、そこの一階が使えるよ。ここから一番近いだろうし、安いからね

「東の大通り・・・分かりました。ありがとうございます」

「いえいえ、しかし君・・・中々変わった服装をしてるね」

男性にそう言われ、俺は自分の着ている服をチラリと見る。

現実の世界の、背中に英語が描かれている白いTシャツと黒い布地に白のラインが幾つか入った半ズボン・・・私服のままだ。

ここが現実の都会だとから何の違和感もないのだが、ここには全く別の世界。

周りを歩く人々は、まるでゲームの住人として出てきそうな、おとぎ話に出てくるキャラクターのような服装をしている。

そんな中、先程言つた通りの服装の俺は明らか浮いている。

「はは・・・これはその、友人から借りた新デザインの服で・・・」

宿屋に行く前に、服屋に行きたいな。

男性に礼を言つて、俺は逃げるよつこそこから立ち去る。

確か、東の大通りと言つてたな。

俺は早足に広場から東の大通りへ移動する。

大通りには広場ほどの人はいないものの、活気は負けず劣らず騒がしい。

しかし、その騒がしさはなにも良いものばかりではない。

「おーおい、ここは酒場は酒も出せねえのかよー！…ああー！？」

どこからか誰かの怒声が聞こえる。

その声の高さからして、まだ俺と同じ年齢、ぐらいか。

恐らく、その声の主であろう人物が数十m先の酒場であろう店からドアを蹴破つて出てきた。

俺の予想通り、そいつは若い男性で右耳に金色のピアスを二つも付け、ツンツンした髪を茶色に染めていて、いかにもガラの悪そうな奴だ。

本来なら近づきたくもない相手なのだが、そいつが出てきた酒場が俺の探している『鶏小屋』であるため嫌でも近づかなければならぬ。

そいつは機嫌が悪そで口を歪めながらこちらに向かってくる。

俺はできるだけ目を合わせない様にそいつの横を通り過ぎようとして

た・・・瞬間。

そいつは、なにも無こと「ひでこきなり」けた。

「・・・ぐふつ、ぐふつ

俺は笑いそうになるのを必死に堪えて空を眺める。

真横から殺氣をこめた視線を感じるが、今のシーンを見た後じゃ全く怖くない。

「・・・ひつ

そいつは、わざとらしく舌打ちすると、ブカブカのズボンについた土を払い手をポケットに突っ込んで歩き去っていく。

しかし俺の笑いはまだ止まりそうにない。

数十秒ほど肩を震わせて、俺は視線を空から地面に移す。

キラツ、と。

日光を浴びて輝く、少し薄汚いコインを見つけた。

大きさは一度500円玉ほど、色は汚れているが元は綺麗な金色だらう。

・・・恐いへ、 さつきの奴の落し物だ。

多分、 ここの世界で金銭の役割をしているものだと思つ。

俺はそのコヤンを拾つて、 躊躇いなくポケットに突っ込んだ。

泥棒とかネコババだとかと言われても受け付けねえから。

「・・・安いんなら、 足つるよな」

俺は独り言を漏らしながら、 ボロボロになつたドアに手をかけた。

店はどんよりとした雰囲気で、数本の小形の蠟燭が店内にほのかな温かさをもたらしている。

客も中々多く、ほとんどどうか全員がおっさんだ。

店の雰囲気とは正反対に、つるさんく思えるほどに騒がしい客達の姿は、耳聞とは思えない雰囲気をかもぢだしている。

しかしだだ一人、ドデカイコップをボロキレで拭いている店のマスターと思しき男性はとても不満そうな顔をしている。

俺は不満そうな表情のマスターの元に近づく。

「あの、すいませ・・・」

「つたぐ、カイトの野郎・・・また店を難に扱いやがつて・・・。
・・ああ、いらっしゃい。先に言つとくけど、酒は駄目だからな」

カイトと並ぶのは十中八九、さつきの若い男性だらう。

まあ、自分の店をあんな風に傷つけられたら誰だつて腹立つだらう。

「いや、カイトってのが誰かイマイチ分かんねえけど、酒なんか飲

まねえよ。俺はここに宿屋を使いたくて来たんですけど」

「あー、一階にジリ弔ね。向いの階段上がつてすぐにある部屋が空
いてるからそこ使えばいいだ。ドアに『01』つて書いてあるから」

マスターはそういうて酒場の一一番奥にある小さな階段を親指で指す。
酒場 자체が狭いため、酒を浴びるよう飲んでいるおっさん達の間
を通りなけばならないのが少し懸念してしまつ。
まあ、とにかく、せつと休むことができる。

俺は一階に上がりつゝと階段に向かおうとする、が。

「ああ、ちょっと待ちな。まずは宿代を払つてもいいぞ」

ビクッ！…と、俺はマスターの声に過剰に反応してしまつ。

拳動不審になりながらも俺は振り返り、冷や汗を垂れ流しながら小声で答える。

「や、やがばくわないと駄目……ですよね……」

「当たり前だろ。一田借りるつてんなら300円な。一田以降は7

「500Gで四日間まで貸せれるだ

「G」というのはこの世界での金銭の呼び方だらうか。

「・・・これで、足りますかね？」

俺はそう言ってポケットに入れてあつた小汚いコインを恐る恐る力
ウンターに乗せる。

マスターは一瞬、嫌そうな顔をしたがコインを摘んで品定めをする
ような顔で「インを見る。

マスターはやはり嫌そうな顔をしているが、コインを放り投げて後
ろの木箱に入れた。

「500Gだな、おつつの200Gだ」

「ふう・・・。ありがとうござります」

俺はマスターから銀色の小さなコインを一枚受け取り、今度こそ階
段を上つて一階に上がる。

内心では、凄く安堵していた。

正直言うと、この「メイン」が本当にお金・・・いや、Gなのか不安だつたし、もしさうだとしてもたつた一枚で足りるか不安だつたからだ。

本当はGを払わずに逃げるつもりだつたのだが、どうやらそんなりスキーなことはしなくても良いようだ。

「ええと・・・『0-1』つて書いてあるドアつて書いてたよな。あとルムナ、近くには人がいないからもう出ても大丈夫だぞ」

俺がそう言つと、懐から一つの光が飛び出した。

妖精の姿をしたルムナだ。

「 プハー!! 息苦しかつた!! 死ぬかと思つた!!」

「 大袈裟すぎるだろ。まあ、とつあえず部屋でまた色々と教えてくれよ」

「 分かつてゐつてー。とにかく入るつよ」

ルムナに急かされて、俺は湿氣を含んで黒茶色になつたドアに手をかける。

ギギイ、と嫌な音を立ててドアが開く。

部屋の内装はシンプルだった。

小さな木の机と、一応は綺麗と言える白いシーツのかぶせてある木のベッドが壁際にある。

そして部屋の中央に天井から垂れ下がるランタンが一つ。

机の目の前にある小さな窓からの日光が、部屋を明るく染めている。

「あー、疲れた！ 今日はもう一休みしたい！ 」

俺の頭の上を飛びまわっていたルムナは、凄い勢いでベッドに突っ込んだ。

しかしベッドの弾力が強過ぎたのか、ルムナはベッドからはじき出されて壁に激突する。

ぶくつ、といづつめき声が聞こえたが、そんなことは気にしない。

「休むのは別に良いけどよ、その前に約束通り『ホームメント』について教えてもらつからな」

「ぶふ・・・わ、分かってるよ。そんな釘を刺さなくとも大丈夫だつて！ 」

「どうだか・・・」

「むーー信じてないでしょー? 分かってるよ、ちやんと説明してから休むよー!」

不機嫌ルムナさんの『H-メント』講座、始まるよー!-

07 「鶏小屋」のマスターさん（後書き）

正直、適当にしました。

反省します、けど修正はしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0760x/>

魔王（正義）に選ばれました。

2011年11月17日18時44分発行